

願浄土真実教行証文類序(三)

高田短期大学学長 栗原 廣海

前回は、親鸞聖人が『教行証文類』「序」の冒頭において、浄土の教えが説かれた機縁について述べられているのを見てきました。

前回の稿の最後に「このような愚かで浅はかな凡夫韋提希に対する教えは、浄土の開示以外にはなかったのです」と書きましたが、韋提希夫人が積尊を前に、自ら胸飾りを引きちぎり、大地に身を投げ出し号泣して申し上げた「世尊よ、私は昔何の罪があつてこのような悪い子を産んだのでしょうか。世尊もまたどのような因縁から提婆達多のような者と親族なのでしょうか」との訴えに、積尊は直接お答えになることはありませんでした。この訴えには、提婆達多の親族として積尊に

積尊はこの訴えに対しては、大悲の心で韋提希を包みつつ、沈黙を続け、自己のすがたのあるがままと、本当に求めるべき真実とは何かについて気づくよう導かれたのでした。そして安らかなさとの世界を求める心を起した韋提希夫人に、今こそ阿弥陀如来の本願を説き、まことの救いを知らしめるときであると積尊は判断され、浄土を開示されたのでした。このことを聖人は「浄邦縁熟」、つまり「浄土の教えを説く縁が熟した」とおっしゃっています。

聖人は続けて次のように述べられます。

これすなわち権化の仁、斉しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆謗闡提を恵まんと欲す。(これは、菩薩がたが仮のすがたをとつて、苦しみ悩むすべての人々を救おうとされたのであり、また積尊が大悲の心から、五逆罪を犯すものや仏の教えを謗るも

も責任の一端があるのだから、何とかこの苦境を打破してくださいと、世俗的で現実的な救いが求められているのではないのでしょうか。その救いは、夫である頻婆娑羅王が七重の牢から救出され、自らも牢から解放されて息子阿闍世が改心し、もとの親子関係にもどるとともに、事件の首謀者である提婆達多が捉えられ、罰せられること。しかし、積尊のとられた対応は、そのような韋提希の願望に直接応え、目先の解決をはかるようなものではありませんでした。それで仮に事件そのものが一時的には解決できたとしても、また新たな事件の展開を生み出すでしょうし、阿闍世の悪行についての自己の責任には思いもおよばず、事件の首謀者提婆の親族として、何とか責任をとつてくださいと積尊に詰め寄る無内省で愚かな自己のすがたを韋提希に気づかせることはできなかったでしょう。

のや、仏になる因を全くもたないものを救おうとお思いになったのである)

浄土の教えが説かれたのは、直接には韋提希夫人のおかげです。しかし、その背景には王舎城の悲劇があつたわけで、この悲劇にかかわる人物がいなければ、韋提希が法を求める心を起すこともなく、したがって積尊が浄土の教えを説かれることもなかったわけです。そこで親鸞聖人は、浄土の教えが説かれる縁が熟することになったのは、韋提希夫人ひとりにとどまらず、王舎城の悲劇に登場するすべての人物のおかげであり、彼らは苦しみ悩む我ら凡夫を救うためにあらわれてくださった還相の菩薩方であつて、これらは、五逆の罪を犯した者も、仏の教えを謗るものも、成仏するたねをもたない者も、だれ一人漏れることなく救おうとなさるブツダが、すべて大悲の心から仕組まれたことであつたのだと、聖人は領解なさつ

ているのです。

聖人は『浄土和讃』『観経意』第七首に次のように讃嘆されます。

大聖おのおのもろともに

凡愚底下のつみびとを

逆悪もらさぬ誓願に

方便引入せしめけり

この一首は、第六首の「弥陀釈迦方便して阿難目連富楼那韋提 達多闇王頻婆娑羅 耆婆月光行雨等」に続きますから、「大聖」とは王舎城の悲劇の登場人物すべてを指し、聖人が彼らを如来として、還相の菩薩として尊崇讃嘆しておられることがわかります。

続いて、聖人は、次のように述べられます。

ゆえに知んぬ、円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を成す正智、難信金剛の信樂は疑いを除き証を獲しむる真理なりと。(よつ

信金剛の信樂は疑を除き真理を証することを獲しむるなり」

驚きました。このような読み方があるとは全く考えてもみなかったからです。対句の形を崩して「正智」を後の句に付け、「信樂」を「真理」とする読み方から離れて、「信樂」は「真理を証することを獲しむるはたらき」であると読んでいます。当然、「正智」も「真理」も、ただ読み方が異なるだけではなく、意味するところが異なっています。

原文は次のような漢文です。

円融至徳嘉号転悪成徳正智難信金剛信樂除疑

獲証真理也

漢文には句読点は付けられませんから、「正智」を後の句に配して読むことは当然あり得るわけです。ところが、「真理」については、高田本山に伝わる真仏上人書写本をはじめ、刊本も含めて現

て、この上ない徳をまどかにそなえた名号は、悪を転じて徳に変えなす正しい智慧のはたらきであり、得難い金剛の信心は、疑いを除いてさとりを得させてくださる真理である)

冒頭の一文に続き、対句形式で格調高くうたいあげられた名文として、この一文も真宗を学ぶものの脳裏に、深く浸透していると言ってもいいでしょう。

ところが過去には、別の読み方があったようですので、ここで簡単に紹介しておきたいと思えます。それは、『教行証文類』の解説は聖人の曾孫である覚如上人の子、存覚上人が著された『教行信証六要鈔』しかなかった江戸時代の初期、高田派の学者の恵雲が著した『教行信証鈔』に書かれている読み方です。

恵雲は次のように読んでいます。

「円融至徳の嘉号は悪を転じて徳を成す。正智難在知りうる諸本はすべて「・・・信樂は疑を除き証を獲しむる真理なり」と読むように返り点が付けられているのです。それにもかかわらず恵雲は「・・・信樂は疑を除き真理を証することを獲しむるなり」と読んでいます。

この問題につきましては、他にもこのような読み方をする恵雲以後の宗学者たちがいたのか、また、このような読み方があらわす意味を後学者たちはどのような評価していたのかについて、「高田恵雲の念仏思想(一)——『教行信証鈔』における「総序」訓読の問題——」(『印度学仏教学研究』第四十九巻第一号、平成十二年十二月)と、『教行証文類』『総序』訓読に関する諸問題(『高田短期大学紀要』第二十号、平成十四年三月)に詳しく述べましたので、関心のある方はご一読いただければ幸いです。